

2017 推・帰・社

受 験 番 号	
------------	--

医学部保健学科

小論文Ⅱ問題

注意事項

1. 試験開始の合図があるまで問題冊子を開いてはいけません。
2. この冊子のページ数は4ページです。落丁、乱丁、印刷不鮮明の箇所等があった場合は申し出てください。
3. 問題冊子の余白は下書きに使用してもかまいません。
4. 解答は所定の解答用紙に記入してください。
5. 解答用紙は持ち帰らないでください。
6. 問題冊子と下書き用紙は持ち帰ってください。

1 次の文章を読んで、問1，2に答えなさい。

オバマ米大統領が現職米大統領として初めて被爆地広島を訪れた。「自分と同じ思いを誰にも二度とさせたくない」。そう願い、核廃絶を訴え続けた被爆者やこれに賛同する日本の市民の思いを、原爆を投下した国のトップが誠実に受け止めた結果と言える。

オバマ氏の原爆慰霊碑への献花や所感表明に立ち会った被爆者の田中熙巳さん(84)は、母子家庭に育った自身を物心両面で支えてくれた2人の伯母ら身内5人を長崎の原爆で失った。

「やっと伯母さんたちの命が奪われたことに前向きの意味が与えられたよ。悔しかったかもしれないが、これから先の人のために役立てることができるよ」。田中さんはオバマ氏と対面する前、こう天国に語り掛けた。

「オバマさんに平身低頭、謝ってもらわなくてもいい。ただ、あの原爆投下は間違いだったと言ってほしい」。広島の爆心地から1.5キロで被爆し数年内に両親を含む身内19人を奪われた貞清百合子さん(77)は歴史的訪問の前日、神戸市内の自宅で語気を強めた。

一人の人間として被爆の実相に直接触れてほしい。謝罪はともかく、核という非人道兵器の使用は間違いだったと大統領に言ってほしい。これが、多くの被爆者に共通する心情だろう。「過ちは繰り返させぬから」と刻まれた広島の原爆慰霊碑の言葉が未来永劫^{えいごう}、実践され続けることを誰もが願っている。

米大統領が「核使用は間違い」と認めることには、実は深遠な現代的意味がある。核問題の権威、米スタンフォード大のスコット・セーガン博士らは米紙への寄稿で最近、次のような米世論調査の結果を紹介している。

イランが核問題での欧米との合意内容をほごにし、米国が厳しい追加制裁を科したのに対し、イランがペルシャ湾上の米空母を攻撃。2千人以上の米兵死者が出たことを受け、米軍はイランへの地上侵攻と核使用の選択肢を大統領に進言した。核使用の犠牲者は最大200万人。この想定で、回答者の59%は核使用に賛同した。

驚愕すべきデータだ。長崎への原爆投下後、幸いにも実戦で核兵器は使われず、70年以上「核のタブー」が続いてきた。だが自国の兵士が多数死傷し、国民の間に交戦国への敵意が高まれば、タブーがあっさり崩れる可能性を示している。だからこそ核兵器を生身の人間に唯一使った国の元首が71年前の残虐行為の非道と違法性を認めることに、「核なき世界」実現に向かう重大な意味が包摂されている。他の核保有国の政治指導者に対する心理的影響も極めて大きいはずだ。

「核兵器を持つこと自体が倫理に反する」。田中さんはこうも語った。歴史的なこの日を、人類全体が協働しながら、核廃絶へ着実に歩みだす新たな誓いの時としたい。絶対悪である核は人類と共存できない。

(出典：論説「核廃絶への誓いの日に」、上毛新聞、2016年5月28日)

問1 文中の下線部「深遠な現代的意味」とはどのようなことか、100字以内にまとめ、解答欄

- 1に記しなさい。

問2 オバマ大統領の被爆地訪問について、筆者が伝えようとしていることを200字以内にまとめ、解答欄 - 2に記しなさい。

2 次の文章を読んで、問1、2に答えなさい。

「勉強する」ということは、「世の中にはこういう学説もあれば、ああいう学説もある」ということを学習することだと信じ切っていたのです。

ところが、アメリカの大学院では、こんな考え方は全く通用しませんでした。

いろいろな学説を学習するという点だけをとりあげれば、ケタちがいに膨大な数の論文を読まなければならないことは確かです。しかし、ただ単に、それらの論文を読めばすむことではないのです。それらの論文を読むのは、すべて、「本当はどうなんだ？」という強烈な「真実性への希求」を軸として、自分自身で徹底的に考えながら読まねばなりません。ただ単に「何々学説によると……」という話ではすまされず、直ちに、「あなたはどうか」と問われるのです。「どうしてこの仮説が本当に正しいと主張できるのか？」、「なぜ別の考え方ができないのか？」、「もしこのことが本当だとしたら、いったい世の中はどういうことになるのか？」、「あなた自身が自分で確かめた事実と、どう関係するのか？」、などなどについて、矢継ぎ早やに質問されるのです。

自分で「こういう実験をしてみたい」と提案した場合も同じことです。「どうしてその仮説が正しいと主張できるのか？」、「その実験の予想される結果は、別の仮説でも説明できるのじゃないのか？」、「そのことが真実だとしたら、私たちの従来の考え方にどのような新しい知見、インパクト、意義があるのか？」、などについて、自分自身で徹底的に考え、他人の前で堂々と弁明できなければならないのです。その場合の「他人」も、同じような立場の人たちばかりでなく、全く対立する立場の人たちや、研究分野の全く異なる立場の人たちの前でも、しっかりと弁明できるものでなければならないのでした。

「本当は何だ？」、「真理はどこにある？」という問いを、本気で、自分自身で問い続けるということの難しさに、全く打ちひしがれてしまいそうでした。

そのような環境の中で5年間を過ごすうちに、ようやく、私の心の中にも、「本当だ」ということを自分自身が真に納得するということの大切さが身にしみてわかりはじめました。学問というものが、「本当だとされていること」を学ぶことではなく、正に、自分自身で、本気で、「何が本当なのか」と問うこと、問いつづけることにあることに気づいたのでした。

「勉強する」ということがそういうことだったとは、それまでの長い学校生活の中で、全く知らずに、小学校、中学校、高校、大学、大学院までをただただどって来ていたのでした。

「本当は何なのだ。」このことを徹底的に問い、問いつづけることの教育は、わが国の場合、本当に急務ではないでしょうか。

どんな人でも、自分自身の過去をふりかえってみたとき、「感化を受けた人」がひとりやふたりはいるものではないでしょうか。

「感化を受ける」というのも、学びの一種です。ただし、「教示されて」学ぶものではありません。

また、そのとき学ぶことの内容も、別に何らかの知識や技能ではないでしょう。むしろ、「生き方」や「ものの見方」といったようなものです。

「感化を受ける」ということは、「真似る」ということでもないようです。その人のものの見方や生き方をたしかに「よいもの」として受け入れ、新しい価値を発見し、それを自分の心の中のそれまでの価値観、自分なりのものの見方や生き方の中に取り込み、融合させるわけです。

「感化を受ける」というのは、本来は受身のことでなく、大変自発的なことのようにです。受ける人の実感としては相手の人が影響を与えているようですが、その実、こちらから求めているといえるのです。なぜなら、こちらに「感化を受ける」心の用意がないときは、どんなにすばらしい人物と出会っても、そのまますれ違うだけのこともあるからです。

(出典：佐伯胖、「わかる」ということの意味(新版), p.207-209, 岩波書店, 2012, 一部改変)

問1 「勉強する」ということについて、筆者の考えを要約して150字以内にまとめ、解答欄

- 1 に記しなさい。

問2 「感化を受ける」ということについて、あなたが体験したことを150字以内にまとめ、

解答欄 - 2 に記しなさい。